

---

# 昆虫戦記

s h u

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

昆虫戦記

### 【Nコード】

N8653C

### 【作者名】

shu

### 【あらすじ】

人間の子がバッタになってしまい、行き場を失くし、バッタの世界のみんなに嫌われ、それでも精一杯生きるバッタの物語りです。

(前書き)

下手くそな小説ですいません。感想書いてください。

「んっ、ここは？」

たしか、俺は、家に帰る途中で、穴に落ちたんだ。上を見ると、俺が倒れている。

「なっ、なんで？」

俺は手足を見た。

「！！」

俺は目を疑った。俺はバツタになっていたんだ。そんなことを考えていたら上から声がしました。

「お前うまそうだな」

猫がこつちを見てヨダレを垂らしている。

「お俺なんか食べてもおいしくなんかない」

俺は後ろに一歩一歩さがっていく。

「ガオー」

猫は俺を食べようとしている。

と、その時、

「ブーン」

「！！」

「私に捕まって」

俺は蝶々にいきなり腕を取られ助けられた。

「ありがとう」

「あなた、羽が傷ついているわね、どうしたの」俺はハツとして、人間の時を思いだした。自転車で帰る途中、自転車でバツタをひいた。そのあと穴に落ちて気がついたら、バツタになっていた。

「上を見てください」

俺は人間を指さした。

「上つて、人間？」「人間がどうかしたの？」

「あれは、さつきまでの俺なんです」

「何言ってるのバツタと人間が入れ代わるなんてありえないわよ」

蝶々はフフツと笑った。俺はそれを見てムカつきながら言った。

「ありえないと思うでしょうが、本当なんだ」

「あら、そつ。じゃあ、私、行くわね」

蝶々は、あのバツタどうかしている。と、考えながら、飛んで行った。

「なんだよ。本当なのに」

バツタは、信じてくれない蝶々を見て考えました。

「もしかして、誰も俺の言う事なんて信じてくれないんじゃないか？」

バツタは今日の事を秘密にして、虫として生きていくと決めました。

バツタは歩いていると道にトンボ達をみつけました。

「んっ？あそこにトンボたちがいる」

バツタはトンボ達の方に歩いていきました。

「こんにちは」

「こんにちは」

「いま、なにをしているんだい？」

バツタはトンボ達に尋ねました。

「蜘蛛をやつつけるために作戦会議をしているんだよ」

トンボ達によると、蜘蛛は、そこらじゅうに、糸を張って、仲間みんな捕まえられてしまっている、という事でした。

「もう何匹も捕まっているんだ」

「みんなの事を助けたいんだ」

トンボの力ではどうしても蜘蛛の糸を壊せない。そこで、トンボ達は力持ちと有名なカブトムシ達に力を借りたいといっていました。

しかし、カブトムシ達は

「助けて欲しければ人間界にある、カブトムシ用のゼリーを持って来い」と言っている、トンボ達は言っています。

「そんなのできるのかい？」

「今、提案しているのが夜、ペットショップに入り込んで盗みだすという提案がでているんだ」

「そんなこと、できるのかい？」

「やってみないとわからないけど、やらなきゃいけないんだ。今日の夜、行くんだけど、君も手伝ってくれるかい？」「もちろん。いいとも」

「じゃあ、夜またここに来てくれ」

そして、夜になりました。仲間のためにトンボ達とバッタは、人間界のペットショップに向かいました。

「あぶない！」

車にトンボ達がひかれそうになってしまいました。バッタは人間の時に道を歩いているからどこが安全か知っています。

「こっちの道の方が安全だよ」

虫の世界から10時間もかけて、ペットショップにトンボ達はつくことができました。トンボ達はペットショップの換気孔から中にはいりました。中に入ると、たくさん犬や猫がいます。

「おい。お前達、ここからオレを出してくれ」

一匹の猫がそう言ったがトンボ達は自分達の事で精一杯だったので無視して、カブトムシのゼリーの方に向かいました。しかし、猫は、さっきよりも大きな声で叫びました。

「ここから出せ」

この鳴き声を聞き付けて奥にいた、人間がやってきてしまった。

「やばい。みんな隠れろ」

トンボ達は急いで隙間に逃げこみました。

さっきまで、叫んでいた猫は、人間に捕まって、注射をうたれていました。

「ギヤー、お前たちのせいだぞ」

猫はこつちを睨みつけたと思うと、眠ってしまいました。注射は睡眠薬だったのです。トンボ達は気を取り直して、奥の昆虫ルームに行きました。そこには、昆虫の餌やカゴが所せましとならんでいます。

「どれも袋に入ってるから取りだせないな」

「しょうがない袋ごともっていこう」

しかし、トンボ達のカじゃどうにもなりません。トンボ達は考えこみました。

トンボ達が考え込んでいる間にさっきの人間が飼っている、犬がこちらに歩いてきます。

「逃げろ」

トンボ達は慌てました。

「お前達、俺の店で何してるんだ」

犬はトンボ達を睨みつけています。トンボ達は必死に言い訳を考えましたがいい言い訳が見つかりません。トンボ達は諦めて本当の事を言いました。

「じつは、仲間が蜘蛛に捕まって、みんなをたすけるためにカブトムシの力が必要なのにカブトムシは（人間界のゼリーをもってこないと協力してくれない）っていつてるんだ」

それを聞いた犬は、トンボ達を助けるのを協力してくれるということです。

「君らには無理でも俺はカブトムシ用のゼリーを持つのは簡単だからな」

「そうと決まれば早く出発しようぜ」

「そうはいかねえ〜んだ」そうです、犬は飼い犬なので主人が寝てからいかないと主人が心配してしまいます。

「そうか。じゃあ夜遅くにこの部屋にまた来てくれ」

トンボ達は、そう言うと、犬は頷き、もとのへやに帰っていきました。

そして、夜になったのに犬はなかなか姿を現しません。

「どくしたんだろ」

トンボ達は不安になりました。

「もしかしたら、さっきいつていたのは嘘なんじゃないか?」「そうかも。だって犬はこの番犬なんだろ」

そんな話しをしていると、後ろから声がしました。

「だれが嘘つきだ?仕事をしていた遅れたんだ」

「そくだったんですか、僕たちはつきりきてくれないかと思いましたがよ」

「俺は約束だけは守るぜ」

犬はまじまじと言いました。

「話しはそれくらいにして人間が起きる前に全部終わらせましょう」  
トンボ達は犬の背中に飛び乗ると犬はゼリーの袋をくわえ虫の世界に走っていきました。犬はトンボ達と違って虫の世界に1時間です着きました。

犬はそのままカブトムシ達の所に行って話しをしました。

「俺はこの後、すぐ帰らないといけないんだ。だからトンボ達を助けられるのは君達だけなんだ。どうか無事にトンボ達を助けてくれ」  
「わかってるよ。正直、トンボ達はゼリーを持ってきてくれなくても助けるつもりだったしな。」  
「トンボ達もがんばれよ。俺はそろそろ帰るからよ」

犬はそう言つとペットショップに帰っていきました。「よし。いまから行こう」カブトムシの言葉にバツタは驚きました。

「なにびっくりしてんだよ?」



「トンボ達はびっくりしなかつたのかい？」

「しないとも。だって僕等は夜行性だけど蜘蛛は夜行性じゃないから今は寝ている時間だろ」

そういうことで今からみんなを助けに行く事になりました。「みんなあとちよつとで蜘蛛の巣に着くぞ。みんなで助けよう」

この言葉でみんなは更に団結力があがりました。

そして、遂に蜘蛛の巣の下まできました。上を見ると蜘蛛が寝ているのが見えました。

トンボ達は蜘蛛を起こさないようにゆっくりと近づいていきます。

「蜘蛛の糸に触れるな。糸が揺れて蜘蛛が起きるぞ」

蜘蛛の手前まで来た所で蜘蛛の糸に絡まっているトンボ達を見つけました。

「おい。あそこにみんないるぞ」

「よし。俺らがいつてこよう」

「頼んだぞ。カブトムシ達」

カブトムシ達はトンボ達が絡まっている蜘蛛の餌置場の蜘蛛の糸を引っ張ってみんなを助けてくれました。

「ごーもありがとうございました」

捕まっていたのはトンボの他に一週間しか生きられない蝉もいました。

「僕達は五日前に蝉になって昨日捕まってしまったんだ」「あと一日しか生きられないじゃないか」

「そうなんです」

「よし。じゃあ今日は蝉達にとって最高の一日にしようよ」

トンボ達は一生懸命、蝉達を笑わせたり、話したりしました。

「みんな。ありがとう。とても楽しかったよ。」

蝉達はそう言い残して静かに生きを引取りました。

「蝉達のお墓を作って最後のお別れをしよう」トンボ達は虫の世界で最も綺麗と言われている場所に蝉達のお墓を作って埋めてあげました。

「蝉達、お別れだけど、お墓には、時々くるからね」

「たった一日だったけど楽しかったよ」

みんながお別れを言ったとき風が蝉達の声に聞こえました。なんとなく、風が

「ありがとうございます」と聞こえたのでした。

蜘蛛に捕まっていた虫達を助けられた。このニユースは虫達の世界中に伝わりました。このニユースはもちろんあの蝶々の耳にも入ったのでした。

「ねえ、ニユース聞いた？蜘蛛をの巣を退治してくれた中にあなたが話していたバツタもいたんだってねえ」

「うん。私もビックリしちゃった。あのイカれたバツタなんだもん」  
蝶々はバツタを使って軽い遊びを考えました。

「あのバツタがイカれてるってみんなが知ったらどうなるかなあ」  
「ひどい。でも楽しそうね」

次の日から蝶々の遊びが始まりました。初めに、隣に住んでいる幼なじみのカマキリにこの事を話すと、カマキリは楽しそうに笑いこ  
ういました。

「いい話を聞いた。バツタをイジメに行ってくる」

このカマキリは、虫の世界でも有名な不良だったので。カマキリは早速バツタを捜しに出かけました。

捜していると、カブトムシに会いました。

「おい。この辺でバツタを見なかったか？」

「いや、見てないな」カマキリはカブトムシと別れバツタを捜しに行きました。

「バツタ、大丈夫かな？カマキリに目をつけられたら終わりだぞ。」

バッタを捜しに行こう」  
カブトムシ達もバッタ捜しに出かけました。

「いないなあ、バッタの奴どこいつちまったんだろう」  
カブトムシはいくら捜しても見つからないのでひとまず巣に戻る事にしました。  
カブトムシは巣に着くとビックリしました。巣にはバッタがいたのです。

「お前なんでこんな所にいるんだい」  
「カマキリが俺を捜していると聞いてカブトムシさん達には悪いと思っただけで隠れさせてもらっていたんだ」

「そうだったのか。しかし、なんでバッタをカマキリは捜してるんだ？」  
「さあ？俺、カマキリになんもしていないのに。この前、カブトムシがカマキリについて話してくれていてよかったよ」

そうです。カブトムシはバッタにカマキリは虫の世界の不良と教えてくれていたのです。

「今日はここに泊まっていけよ。外は危険だ。明日、俺がカマキリになんてお前を捜しているか聞いてきてやるから」

「そうしてもらおうとありがたいよ」

次の日

「俺はカマキリを捜して訳を聞いてくるよ」

「じゃあ、俺達はバッタをかくまっているな」

「みんなありがとう」カマキリが蜘蛛の巣の近くにしていると情報を聞いてカブトムシはすぐに向かいました。

「やあカマキリ。君がバッタを捜していると聞いたんだが、なんで捜しているんだい？」

「この話しは蝶々に聞いたんだが、バッタは昔人間だったと言っているんだ。カブトムシもバッタと仲良くしていると仲間だと思われちまうぜ」「お前、まだバッタを探しに行くのかい？」

「ああ。行くとも」

カブトムシは少し考えてから言いました。

「バッタなら俺らの巣にいるぜ。仲間に事情を言って巣をでてもらうからそのあと巣に行けよ」

「じゃあ、早く言ってこいよ」「お前、まだバッタを探しに行くのかい？」

「ああ。行くとも」

カブトムシは少し考えてから言いました。

「バッタなら俺らの巣にいるぜ。仲間に事情を言って巣をでてもらうからそのあと巣に行けよ」

「じゃあ、早く言ってこいよ」「お前、まだバッタを探しに行くのかい？」

「ああ。行くとも」

カブトムシは少し考えてから言いました。

「バッタなら俺らの巣にいるぜ。仲間に事情を言って巣をでてもらうからそのあと巣に行けよ」

「じゃあ、早く言ってこいよ」「お前、まだバッタを探しに行くのかい？」

「ああ。行くとも」

カブトムシは少し考えてから言いました。

「バッタなら俺らの巣にいるぜ。仲間に事情を言って巣をでてもらうからそのあと巣に行けよ」

「じゃあ、早く言ってこいよ」

カブトムシは自分の巣に戻りカブトムシだけを集めてカマキリに聞いた事を話しました。

「わかった。じゃあ、おれらは外に行くからカマキリを連れてこいよ」

「ああ」

「お〜い、バッタ〜、おれらちょっと出かけてくるな。お前はここにいろよ」

カブトムシが出て行ってしまった後、バッタはうとうととしてきました。

「いけない。寝てしまったら何か起こった時に大変だ」  
自分に言い聞かせながらバッタは寝ないようになっています。

「いい心掛けだな」

後ろから声がしました。

「あんたは？」

「俺か？俺はテントウムシのゴローだ。お前を助けに来たんだ」

「俺を？なんで？」

「お前、昔、人間だったんだろ？それでカマキリにやられそうなんだろ？俺のじいちゃんも昔、人間だって言っていて、カマキリに殺されたんだ…でも、じいちゃんはイカれてなんかいないんだ。」  
なんと、テントウムシのおじいちゃんも昔、人間だったんです。

「それで、僕は何をすれば？」

「何もしなくていい」

「何もですか？」

「心配するな。俺が守ってやるから。俺はカマキリよりも強いんだ」

ぞ」

「あなたがですか？」

「大丈夫さ」

「俺より強いって？誰がだ」「俺さ」

遂に、カブトムシの巣にカマキリが来てしまいました。

カブトムシは巣のまわりから中を見ています。

「なんで、バッタがここにいるとわかった？」

「カブトムシが教えてくれたのさ」

「カブトムシさん。なんでですか？」

「カマキリに話しは聞いた。お前はイカれている。それに俺らに隠しているなんて許せない」

「それは…」

「もういい。バッタ、裏切り者はもうしょうがない。後ろに下がっている」

「このヤロー。調子に乗りやがってえ」

カマキリが突進してきます。

ズドン

凄い音がカブトムシの巣に響きました。

「あ、上げてくれ」

「無理だ。いくらあがいてもそこからは抜けだせない」

「お前、カマキリに何をした？」

「カマキリがここに来る事はわかっていた。だから俺はさっき、穴を掘って中に水を流し混んどいた」

「畜生」。カマキリをよくもやったな」

こんどはカブトムシが向かってきそうです。「いまだ。逃げるぞ」

テントウムシとバッタは裏口から逃げだしました。

「くそ。逃げられた。みんなにこの事を伝えに行こう」

カブトムシ達は虫の世界のみんなにバッタの事を話しに行きました。反応はいろいろでした。軽蔑する人もいれば人間だった時の事に興

味津々の人も居ました。そこでカブトムシは、虫の世界の村長にこの事を話し、法律を作るように促しました。

「みんな、バツタが本当にイカれてると思っと思っていません。でも、バツタは本当にイカれているんです。だから、何かあのバツタについて法律を作ってください」「そうは言っても簡単には法律を作れないんじゃない」

「事件はもう起きています。カマキリがバツタとテントウムシによつて殺されたんですよ」

「何？それが本当ならただちに法律を作り、みんなに伝えんといかなん」

村長は悩んだ結果、法律の名前をバツタ隔離法と名付けました。

この法律は、バツタと一切関わってはならない。バツタと関わったら30年以下の懲役。

この法律にバツタは驚きテントウムシに言いました。「もう、僕には関わらないほうがいいよ…」

「何言ってるんだい！僕はいつでも君の味方だぞ」

「僕に関わるなど言っているだろ！」

バツタはぶつきらばうに言いテントウムシを追い出しました。

「なんだよバツタの奴。もう知らないからな」

テントウムシはバツタの事が気になりつつもバツタを避け続けました。

そんなある日、バツタが虫界の警察に捕まった、とテントウムシは聞きました。

「ふん。バツタなんか知らないからな」

テントウムシはこう言っていますが、バツタの事が気になります。

結局、テントウムシはバツタが捕まっている牢屋の隅まで来てしまいました。

牢屋からはバツタと警察のスズメバチの話し声が聞こえてきました。「お前の死刑執行日が決まった。二日後の夕刻だ。楽に死ぬると思っなよ」

警察は笑いながら去って行きました。

ジャリ

テントウムシが動いた時に足音がなってバツタに見つかってしまいました。

「見る。俺はこのザマだ。笑いたきゃ笑えばいい」

「お前を助けられるかも知れないぞ。お前が捕まったと聞いて弁護士に話しをしに言った。その弁護士はお前を助けられるかも知れないと言ったんだ。その人に今日来てもらっている」「どーも。キリギリス弁護会社のキリギリスです。あなたを助けに来ました」

「本当に俺は助かるのか」

「絶対とは言えないが裁判は高い確率で勝てるだろう」

「裁判を起こすのか？」

「そうだ。裁判なら勝てるかも知れないぞ」

「わかった。裁判を起こしてくれ」

「そう思うと思ってもう申請して来た。裁判は明日だ」

そこでまたさっきの警察官が帰ってきました。

「いま裁判署から電話が来た。お前、裁判を起こすきだつてな。とりあえず釈放だ。明日、裁判署に必ず来いよ」

警察官はまたさっきの道を帰って行きました。

「よし。とりあえず私の事務所に来たまえ」



3匹は並んで歩き、事務所に向かった。

「ついたよ。さあ、入って」

「おじやまします」

「明日は、私が全て話しをする。君達は、裁判官の言った質問に答えなければいいから」

「わかりました」

「バツタを無罪とする」

「ありがとうございます。キリギリスさんのおかげです」

「たいしたことないですよ。それでは私はこれで失礼します」

「さよなら」

バツタ達が町を歩いていると、ヒソヒソとみんながこっちを見て話しをしています。

「ホラ。来たわよ。あの二匹、カマキリを殺したのに、無罪だったんだって、怖いわね。町から出ていってくれないかしら」

「しっ。聞かれたら殺されちゃうわよ」

会話をしていたおばさん達はバツタが近くまでやってくると、家に入ってしまった。

「僕達はこの町にはいけないようだね。旅に出ようよ。二人で静かに過ごせる夢の楽園に」

「そうだね。今から出発しよう」

「この山を越えれば夢の楽園があるかな」

「きつとあるぞ」

もうこの頃には、山を十数個、越えていて、季節は冬になっていて、

餌はなくなっていました。「眠いよ。さあ夢の楽園に早く行こうよ」  
二人はお腹が減っていたし、いくら歩いても夢の楽園がないので、  
本当にいかれてしまいました。

二人は重なり合って、静かに息を引き取りました。夢の楽園に二人  
は仲良く向かいました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8653c/>

---

昆虫戦記

2010年10月10日23時40分発行